

新刊
紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
divine."

「大下角一教授説教論説集」京都・同志社大
学神学部、B6判三一〇頁、定価四〇〇円。

大下先生の遺稿が出版されました。いつも現実を見つめて具体的にかつ卒直に語られた先生の風格がこの書からもうかがえて、先生に対する思慕の情を新たにします。

先生が社会の動向に対して特別なセンスを持っていたことには定評があります。日米開戦に際してはその無謀をはばからず語って当時の青年達の不興をかいました。戦時中には戦後の社会の混乱を心配されましたが、その予言はほとんどの的中しました。

しかし遺稿集によって今さらのように教えられることは、先生の信仰が極めてオーソドックスなものであったということだと思っています。「福音に忠実でなければならぬ」「その真理をいかにして現代人に理解せしめるか」この二つのモチーフが遺稿を貫いています。そしてそれが先生の生涯の問題でもありました。

戦後の指導原理として、先生はまたキリスト教的歴史観の確立を主張され、青年指導に今必要なことは教会がその終末論を明白にして夢と希望を与えることだとしています。

豪快に、卒直に戦い続けた先生ほど「開拓者の精神」を身につけた人は少ないと思いますが、それはまた同志社スピリットの華であったともいえないでしょうか。先生はある年の卒業生への告示の中にもいっています。

「人の最大の使命は、他人のしたことのくり返えしではなく各人に独自の可能性を実現することである」。

この書が多くの人に愛読され、時代と社会に対する幻を新にされるよう願ってやみ

ません。(榎方)

岡 光夫(経済学部教授)著「封建村落の研究」東京・有斐閣、A5判二三八頁、定価六八〇円。

著書は北大卒、東大大学院で日本近世農業史を専攻し昭和二八年修了、兵庫農科大学教授を経て現職につき、日本経済史を講じている。

本書は過去十年にわたる研究成果を纏めたもので、最初、兵庫農大に新設講座主任として赴任した関係上、史料を大学所在地旧篠山藩領に求め、同藩の村落規制を農業生産と関連させて掘り下げたものである。

第一章は荘園体制から幕藩体制への移行に大きな役割を果たした「在地領主」の形成と消滅を素描しているが、篠山附近に在った東寺を領家とする小荘園の消滅過程を明らかにし、第二章は村落成立に影響を及ぼした灌漑を考察、第三章は入会林野の利用形態と村落構成との関連を、第四章は村落における商品生産の展開と流通面に作用する規制を明らかにし、第五章では賃銀の地方差による労働力の他領移動に対する村の

規制を時代的に見てその変化を明らかにし、更に補論として、村落研究の重要課題の一つである村落における余業の展開が城下町商業に与えた影響を考察している。

全篇を通じて実証に使用された史料は頗る広範囲にわたり、古文書、古記録文献類の数もざっと八四種、本書中に引用の史料は抄録を含めて約一〇六通に達し、更に「年中行事郡御奉行」なる篠山藩の行政に関する貴重史料が附録として復刻されている。また弘仁六年（八一五）から明治二年（一八六九）にわたる本書の記載に関連する年表を附けたことは本書を読む上に便利である。

史料判断の上で著者の慧眼のきらめきを所々に感ずるのみならず、全巻を通じ、極めてきびしい実証に終始した著者の努力に多大の敬意を捧げる。（一）

憲法研究所編 特集2「平和思想史」 京都

・法律文化社、A5判一三七頁、定価三〇〇円。

同志社大学の田畑忍教授が主宰する憲法研究所が公にした二冊目の特集である。聖書

の中にあるイザヤの平和の予言から、幣原喜重郎首相の新憲法制定をめぐる平和主義的实践にいたるまで、内外の先人たちが残した平和思想がそれぞれ要約的にまとめられている。執筆陣も、同研究所のメンバーのほか、片山哲、鈴木茂三郎、神近市子らの諸氏が加わっている。

内容の一端を紹介すると、一九三二年ノーベル平和賞を受賞したイギリスの政治経済評論家ノーマン・エンジェルは、第一次大戦の起る直前に著わした「ヨーロッパの幻覚」の中で「戦争は完全に勝つとわかつていて時ですら、道徳・物質的利益をもたらさない」と戦争の無益を主張した。一方、日露の風雲急を告げる明治三十六年内村鑑三は「戦争廃止論」の中で「戦争の利益は強盗の利益である」と断じ「その結果として彼が剣を抜いて盗み得しものより数層倍のものを以て彼の罪悪を償わざるを得ざるに至る」とのべた。これらのことばの正しさは、二度の大戦を経験した今日、ますますその意義を深めているといえよう。過日死去したマッカーサー元帥は一九五五年ロサンゼルス市の祝賀会で演説した

おり、日本国憲法の制定にふれ「日本人は未来の戦争が自殺的行為であることを知っている唯一の国民である。私は日本人が新憲法を作るにあたってこの問題に直面したとき、まざまざとこれを思い起こした」といい「当時の賢明な幣原首相は私を訪れ、日本国民は国際的紛争解決の手段として戦争を廃止すべきであると要望した」とのべたという。

憲法擁護の立場から書かれた田畑忍教授の「戦争の論理と平和の論理」黒田了一大阪大教授の「日本国憲法の平和主義」と題する二つの論文も収められており、一読に値する。（毎日新聞 昭和39年4月11日付）

同志社女子中学校生徒会編「れんが 第三号」
A5判一八二頁。

「れんが」は女子中学校の生徒会誌で、毎年三月に刊行される。この種の雑誌にありがちな、無味乾燥のものではなく、記事、写真とも新鮮かつ豊富。研究発表あり、創作、随想あり、座談会あり、旅行記ありで、結構、楽しみながら生徒会の活動や学校生活を行うことができる。